大陸横断貨物列車の輝き

いつだったか、久しぶりの夜中の強行軍ツーリングをした時のことをふと思い出したりする。

ぐぐっとアクセルを思いっきりひらいて、アメリカ中西部の高原砂漠地帯に丈夫なバンソウコウを貼り付けたようにあちこちに横たわるインターステートをとばしていた時である。街を抜けて数分もすると月明かりくらいしか明かりの源は無くなってしまう。空一面に広がって、エンジン音と振動を微妙に頭全体に伝えてくるヘルメットの上から覆い被さってくるような無数の星たちが光り輝いている。空ってこんなに大きかったのかと疑ってしまうほどの迫力である。

光といえば目の前に見える薄明るいスピードメーターのライトとその前方を、エンジンの鼓動をビジュアルにディスプレイするかのようにかすかにゆれ続けながら照らすヘッドライトだけである。

バックミラーに映る車の光りもなく、また対向車線を走る車の数も片手で数えるくらいしかない。孤独で単調な走りを慰めるようにヘッドライトに照らされながら流れる路面。そして、その存在を嘲け笑うかのように包み込む暗闇に静寂。眠気と疲労とのタッグチームに対してなすすべがないながらも精神力で肉体の疲労と戦いながら、肥

満気味にむくれて見事に垂れ下がってくる瞼をかき上げながら走り続けた。

ヘッドライトにすざましい勢いで特攻隊を演ずる夜の虫たちは、そのハロゲンの光がよほど眩しかったのか、その光を少しでも他の仲間たちの妨げにならないように、自分の体をもってぶつかって来てその光を弱めようとしているかのようであった。

しかし、その時である。遥か彼方、私の進行方向の右前方から、まるでその虫たちの心理状況に自分が引き入れられるような、強烈なハイビームをもって私の目の中に突き刺さるような物体が現れたのだった。それは確実なスピードで私に向かってきていた。

イタ車ドカッティーのモトクロス車。450 単気筒

なんのためらいもなく、数年来の経験より培った私の必殺技のハイビーム攻撃を、その鍛えた親指の付け根の筋肉の収縮をもって浴びせかえしたのだ。ハイ、ロー、ハイ、ローと馬の調教でもするかのような滑らかな、しかしながら厳しいリズムをもって左手の親指が上下に動いた。

ところが相手は何の反応も示さず、はたやそのハイビーム攻撃を緩めようともせず暗闇を突き裂きながら向かってくる。むむむーんと跳ね上がる感情の高まりを感じながら、知らず知らずのうちに眠気や疲労も忘れ、いざ合戦と言わんばかりに火縄銃を構え、人差し指に神経を集中して相手を狙うようににらみ合ってだんだんとその距離を縮めていったのである。射程距離に入った。しかし・・・

その感動的な戦いのクライマックスは会場

長年の愛車だったSR500の81年式。アメリカ仕様では、最終型となる

のお客さんも予期せぬどんでん返しによって幕を閉じたのである。なんとその相手にはロービームがついていなかったのである。不覚であった。

今時ハイ・ローの切り替えが付いていない乗り物があるとは夢にも思わなかったのである。それはハイウエーを走らず、信号に悩まされることもなく2本のレールの上を鉄の車輪を回して走っていたのである。百を超えると思われるほどの長い貨物の列を暗闇から弾けださせるように、この先頭車両に連なる四連のディーゼルロコモーターは全身の力をその先頭に構えた大きなヘッドライトに注ぎ込みながら突き進んで来た。ああ眩しい。

一九九六年

ユタ州キャニオンランズ国立公園にて。79年式カワサキ KZ1000mk Ⅱ

ある夜間走行の思い出

ふと空を見上げてみると、まるで頭上から覆い被さってくるような勢いの星が辺り一面の暗闇を照らしながら輝いていた。

あれはどの辺だったのだろうか。コロラドの大都市を離れ、ロッキー山脈を越えて、ユタ州の砂漠道を抜けるような景色の中に横たわるインターステートを走っていた。夜も遅くなっていたが、シートに食い込んでしまったお尻を浮かす気もなく、またアクセルをゆるめる気が不思議としなかった。

何回も通ったこのハイウエイも、走るたびに違ったスピリットを感じさせてくれる。ましてや夜の走行となると、昼間とは違ったものが見えてくる。何千、何万という数の星の光がその強弱はあるにせよ、前方から迫っては背後に消

モニュメントバレーの日の出

えてゆくセンターラインを見つめる自分の頭上から休むこともなく突き刺さるようにして輝いている。後方には走り残した排気音が余韻を残して消えてゆく。寂しさを慰めてくれるかのようにヘッドライトの光の先から、その光源であるライトまで一直線に虫たちがぶつかってくる。

すれ違う車はほとんどなく、追い抜いてゆく車さえない。寂しくも思える孤独なソロツーリングだが、貸し切りでハイウエイを流すような気もして、決して悪いものではない。が、長距離ツーリングとなると疲労と集中力との葛藤が、遅かれ早かれ所構わず始まる。時々すれ違うようにして現れては消える緑色に白色文字で示された案内標識。

何回か給油のためにガススタンドにとまりながら目的地に向かう。ユタ州のモアブで軽く休んだ後、ひたすら南に向かって走り続け赤い岩たちの群れがあちこちに隆起

アメリカ中西部砂漠地帯を走るハイウェイ（航空写真）

西部劇でも有名なモニュメントバレー。いつ訪れてもすばらしいパノラマを見せてくれる（ユタ州側）

するブラフ、メキシカンハットを抜けてモニュメントバレーの北側に着いたのは丁度日の出の1時間くらい前だった。

走り続けてきた自分に愛想をつかすことなく見守ってくれた星たちが、最後の力を振り絞るかのように光を一段と強めながら輝いている。回り続けてくれたエンジンを切ると、チンチンチンっと暖まった愛車が呼吸を整えながら休もうとしている。あたりは静まり返り動物の声が聞こえてくるような気がする。静寂が疲れと戦った体に心理的な安心感を与えてくれる。

日の出が近づくと東の空がうっすらとオレンジがかった色合いを醸し出しながら明るくなってくる。かすかに周りの岩山の輪郭がパノラマ状に浮かび上がってくる。幻想的な光景が目の前に広がる。時間を忘れて日の出に酔う。

太陽の光が、その登場を前に空一杯を赤く染めはじめる。そして、直視出来ないすざましい明るさの太陽が地平線から顔をだす。

まだ、それでも柔らかい光はあたりの岩山にあたり、ほろ柔らかい赤みを出した岩肌をやさしく労(いたわ)るかのように照らし始める。この景色の中で自分も絵の中に入ってしまうような錯覚を持ってしまう。ほんの一時の感動が、太陽の温かさをもって、ここまでたどり着くまでの疲労を癒してくれる。そして、自然の偉大さ、美しさを改めて脳裏に焼き付けてくれる。

徹夜走行となってしまったが、体力に気力をつけさせてモニュメント・バレーを抜け、アリゾナ州に入った。ここは砂漠地帯。いつものガススタンドで休息してカイエンタに向かう。東に進路を向けてフォー・コー

モニュメントバレー。この景色は、多くの映画、パンフレットなどに登場している

アメリカで唯一四つの州が出会う所、フォーコーナーズ

ナーズ（コロラド、ユタ、アリゾナ、ニューメキシコ州が出会う名所）へ。

そしてコロラドの南西部から帰途につく。といっても日本の73％ほどもある東西に長い長方形型のコロラド州の南西部の角に入っただけである。ここからまだ7、8時間はある。

デュランゴの手前にはメサベルデ国立公園がある。アナサシ・インディアンの遺跡で有名なところである。何百年も前にこの地域の岸壁にクリフ・ドウエリングと言われる岩を積み上げて造られた住居に住み、一つの文化を形成していた現代の現住アメリカ人たちの先祖と言われる種族の遺跡である。

ウルフ・クリーク峠を越えてアラモサへ向かう。山岳部の麓に不思議なパノラマを創り出すかのように聳える、高いところは200メートルほどになるという大砂丘、グレイト・サンド・

デューンズ国定モニュメントを左手にして、サングレ・デ・クリスト山脈を抜け、ウェルセンバーグからインターステート２５号を北進し、デンバーへと戻った。中西部の見所は実に多い。ただしＡ点からＢ点への移動が大儀なことが往々にしてある。それだけ大きな自然が、衛星写真で観たらごみ粒ほどでしかない自分とバイクが、繊維の糸の様に伸びるハイウエイを肉眼では見きれないほどの速度で走ってきた。その夜の走行の状況を、この大陸のあちこちにある夜景が輝く町々の点との位置関係をイメージして、真っ暗なハイウエイをただ走り続けてきた自分に何ともいえない満足感を与えてくれたことに気づいたのは、ぐっすりと休んで疲れを癒した翌日の夜空を見上げた時であった。

フォーコーナーズ・サインで、４つの州をまたぐ。周りは全くの砂漠地帯